『 まずは聞く 』

「先生！〇〇が泣いています！」「先生！〇〇と〇〇がけんかしています！」と、緊急事態が発生しましたと言わんばかりの勢いで、子ども達は担任に教えに来ます。この状況は、とりわけ小学3年生頃までよく見られます。

さて、この一報を受けた時に、担任がどのような対応をするかで、その後の学級経営に微妙なもしくは相当の影響をもたらすこととなります。

「またか・・・」と思い込んでしまったら、私は「まずい」と思います。なぜか？

「あの子は、ちょっとしたことでよく泣く子。どうせ、また、ちょっと何か言われたりしたんだろう」というような先入観を持った状態でその子と向き合うこととなります。思い込みを持っていますので、状況の捉え方が一面的になります。したがって、話の聞き取りもおざなりになり、しまいには「そんなことぐらいで泣くんじゃありません」で、対応終了となることもままあります。

もしかしたら、その子が言われたことは、受け流したり無視したりしても支障のない内容だったかもしれませんが、それを判断するためにも、思い込みを捨て、ていねいにその子から話を聞くことがとても大切です。もし、泣き止まないようなら、「今はまだ、泣いて話ができなさそうだから、泣き止んであなたが落ち着いたら、話を聞きますね」と伝え、本人が納得したら、そのようにします。こうしますと、授業への支障もほとんどなく、かつその子にとっても、「先生は、私の話をちゃんと聞こうとしてくれている」と受け止め、安心感を持つとともに、担任への信頼も芽生える可能性が出てきます。

この提案に、本人が納得しない場合もあります。その子が「今、聞いてほしい！」と訴えた場合は、「そうか。わかりました。じゃ、何があったのか話してください。ただ、もう授業中だから話を聞くのは“2分”です。それで終わらなければ、次の休み時間に残りを聞きます」と対応します。当然、他の子ども達には、何らかの指示を出して自学させます。

「けんか」の場合も、「やれやれ、またか・・・」とってしまうのは、とても危険です。「けんか」が起きるには、何か理由があるのです。そここのところを両者及び関係者から丁寧に聞きとることがとても大切です。つまり、事実関係を明らかにするのです。

「たかが子どものけんかで、事実関係を明らかにするとは、ずいぶん大ごとですね」と思われる方もおられるかもしれませんが、私はとても重要視しています。

例えば、けんかの結果として、どちらかが泣いているとします。「どうした？」と、泣いている子に聞きます。「〇〇が、たたいた！」「〇〇、たたいたのか？」「はい・・・」「暴力はダメじゃないか。謝りなさい」この展開は、最悪です。

もし、何らかの当人なりの理由があっただいてしまったとしたら、この対応には、たたいてしまった子には不満が残ります。また、けんかの様子を近くで見ていた子がいたとしたら、「え？あの子だけが、叱られた・・・」と、担任に対して疑問や不信感を持つかもしれません。

ではどうするか？例えば次のような展開が考えられます（小学3年生くらいをイメージしています）。

泣いている子をAくん。たたいた子をBくんとします。話を聞きとる前に、Aくんにケガがないか確認します。その後、

「Aくん、どうした?」「Bくんが、たたいた・・・」「Bくん、Aくんをたたいたの?」「たたいた・・・」「たたいた。そうか。ところで、何か理由があったのですか?」「だって、Aくんが、ぼくのことを馬鹿にしてきた」「Aくんは、どんなことを言ってきましたか?」「OOと、言ってきました」「Aくん、そういうことをBくんに言ったのですか?」「うん・・・」「そうか、言っちゃったか」「ところで、Aくんは、Bくんから、何か嫌なことをされたから、そういうことを言ったのですか?」「いいえ」「ということは、Bくんは何もしていないのに、君は、BくんをOOと言ったのですね」「はい」

「Bくんは、Aくんを馬鹿にされたからたたいたと言ったね。その時、どんな気持ちだった?」「腹が立って・・・」「馬鹿にされたら、腹は立つよね。先生も同じ気持ちになるな」「たださ、今、もう一度考えると、たたく以外の方法はなかったかな?」「うーん・・・。『馬鹿って言うな』と口で・・・」「そうだな。言われたからたたいていいですとはならないよな」「もし、たたいたところが、目とか頭だったら、君が思っている以上の大けがになることもあるよ。病院に行って、治療することになったら、君、責任とれる?」「いいえ」

「さて、まとめるよ」「今回のけんかのきっかけは、Aくんが作りました。一番悪いのはAくんです」「Aくんが、Bくんを馬鹿にしなかったら、こんなことにはならなかったよね」「次に、Bくんは、馬鹿にされて腹が立ったのでたたいてしまったのだけれど、それがいい方法ではなかったよね」「かあっとしちゃったけど、手を出すのはまずいよね。Bくんどう思う?」「そう思う・・・」「でも、口で言い返すのは、Bくん苦手だよな」「うん」「もし、同じようなことが起きたら、どうする?」「うーん。がまんする」「そうか、がまんするか。でも、けっこうそれって難しい時もあるよね」「うん」「何か言われて腹が立った時、まずはがまんしてみて、次に先生に教えてくれないかな。そうしたら、すぐに君の話が聞けます。どうだろう?」「やってみます」

「では、Aくん。君は、Bくんを馬鹿にしたね。そのことをどう思いますか?」「悪いことだと思います」「そうか。本当にそう思っているのなら、君はBくんに対して何かやることがあると思うけど」「Bくんを、馬鹿にしたことを謝ります」「では、どうぞ」

「Bくん。馬鹿にされたので腹が立ったのはわかるけど、Aくんをたたいたのはまずかったと思います。君はどう思う?」「ダメだったと思います」「そうか。では、その点については、Aくんに対して何かやることがあると思うけど」「Aくんを、たたいたことを謝ります」「では、どうぞ」

「Aくん、Bくん。何かまだもやもやしているところはないですか?」「ありません」「じゃあ、このけんかについては、これでおしまい」

以上の展開で、大事なところは、当事者が、それぞれの非を認め、その点については謝罪するということです。言い換えると、双方の非に気づかせ、「その点は、まずかった」と反省させること。そして、できるだけ、当事者の口から、自分の言葉で、したことや気持ちや思うところを述べさせることです。担任が、子どもが話すべきことまで代わりにしゃべってしまうことは、やってはいけないことです。

学校現場では、日々、様々なトラブルが起きますが、できうる限りその日のうちに解決し、トラブルの当事者も、スッキリした気持ちで家に帰ってほしいと思っています。

多忙な教員にとって、トラブルへ対応する時間は限られています。何かトラブルが起きた時には、当事者の心情に共感し、時にその心情を揺さぶりながら丁寧に事実関係を明らかにすることは、絶対必要なことですし、これができることが、教員の大事な能力だと思っています。

「ピンチはチャンス」と言われています。トラブルの発生は、実は担任が子ども達からの信頼を得る(もしくは信頼が増す)好機なのです。日々、学校現場で奮闘されている教員の皆さんが、誰もが納得できる、そして適切かつ鮮やかにトラブルを解決する姿を、子ども達に見せてあげて欲しいと思っています。